ZENSHOに挑戦しよう！（仮題）

新連載・乞うご期待！

来月号から養正館館長・渡辺貴斗氏の連載がスタートします。

渡辺貴斗氏は、昨年の全日本少年少女空手道選手権（通称：全少）に強豪・静岡県から12名の出場選手、うち７名の入賞者を輩出した養正館の館長。
しかし、このような素晴らしい結果を出している渡辺氏ですが、最初は挫折の連続、子供たちを試合に出しても全く勝てず絶望感を味わっていました。
その渡辺氏が、空手道とは別の才能である卓越した分析力をフルに活用し、「全少」空手を徹底研究。技術研究もさることながら、児童心理から成功哲学まで研究し全少大会に大勢の選手を送り出すことができるようになりました。そのノウハウを隠さず全て紹介していただくという企画です。
今月号は新連載に先立ち、自己紹介をしていただきます。

◆父・渡辺貞雄（初代館長）に感謝

私の父、渡辺貞雄は昭和23年、15歳で空手を始め、20歳で遠山寛賢先生（修道館、現・泊親会）から初段を頂き（写真１）、引き続き金城裕先生（研修会）に師事しました。金城先生は、吉祥寺に修徳館、墨田区押上に研修会本部道場をおき「養正館」と命名されました。

昭和43年6月、我が「養正館」は、その由緒ある看板をそのまま頂いたものです。金城先生に抱っこされている赤ちゃんは私です（写真２）。研修会副会長であった父はその後、独立し「日本空手道鴻志会」を立ち上げました。

金城門下の道場からは、全少からマスターズまで、

（写真１）父が遠山寛賢先生からいただいた直筆の免状。

（写真２）養正館道場前にて金城先生と筆者（０歳）のツーショット。

この写真は、父が大切にしていた大変珍しい写真です。各会派の開祖がたくさん集合しています。昭和31年、山梨県で行われた演武会だそうです。後列左から１番目・藤本貞治先生（国際空手道尚武会）、後列左から２番目・渡辺貞雄先生（日本空手道鴻志会）、前列右から３番目・中山正敏先生（日本空手協会）、前列左から３番目・山口剛玄先生（全日本空手道剛柔会）、前列左から２番目・金城裕先生（日本空手道研修会）。

全国レベル、世界レベルの選手が多く輩出されています。特筆すべき道場として、国際空手道尚武会（藤本貞治先生）、研修会赤門道場（中村孝先生）、拳勝館空手アカデミー（木村英勇先生）、正統唐手成徳会（三谷和也先生）などが挙げられます。

私は小学１年で養正館に入門し、小学生時代は週５回の稽古を半分強制的にやらされていましたが、今となっては人に教えられるまでにしてもらった父に感謝しています。

◆死にもの狂いで日々創意工夫

空手とは全く関係のない仕事に就いて、東京で働いていた私でしたが、2001 年に父の病気をきっかけに、道場を継ぐ決意をし、沼津に戻ってきました。

決意の証しとしても自分を追い込むために全ての仕事を辞めてきましたが、空手一本で生計を立てるのはたやすいことではありませんでした。また当初、子供たちを試合に出しても全く勝てず絶望感を味わいました。

沼津に戻ってきて一年ほどで父は他界しましたが、その一年で父から全てを習うには時間が短すぎました。生きていくためには生徒を集めなくてはなりませんし、試合に出しても勝てなければ保護者の不満もたまります。

そこからは、死にもの狂いで日々創意工夫し努力してまいりました。そして、道場経営を始めて７年後の 2008 年、ついに全少入賞者２名（３位・５位）を出すことができました。それまでの試行錯誤から生み出されたものが間違えていなかった、と手応えを感じた瞬間でした。以後、年を追う毎に結果が積み上げられて行きました。

◆包み隠さず経験を開示

来月号から連載という形で、私の経験したことを失敗も含め、率直に書かせていただこうと思っています。

具体的には、若き指導者のみなさんへ向けた「選手育成と道場経営」的側面と、ジュニア選手のママさんに向けた「子供への声掛け」の２面に亘って、私の経験してきたことを中心に紹介していきます。少しでもみなさんのお役に立てれば幸いです。

PROFILE
■渡辺貴斗　TAKATO WATANABE
1968 年４月 20 日生まれ。
７歳から父である館長から厳しく空手の手ほどきを受ける。東大大学院博士号を取得し、東大に研究者として勤務。後、先代が病気となったことから一大決心をして、養正館を継ぐ。持ち前の研究魂から道場経営でも創意工夫の結果、一道場で 300 名と大躍進。

日本空手道鴻志会空手道場養正館
静岡県沼津市本田町 11-12